

松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

一 県営畑地帯総合土地改良事業曾於東部地区

(仮屋工区・前谷工区) に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書一

<small>ひえ</small> 稗	<small>が</small> ヶ	<small>きこ</small> 迫	B	遺	跡
稗	ヶ	迫	C	遺	跡
<small>まえ</small> 前		<small>たに</small> 谷	B	遺	跡

1989年3月

鹿児島県曾於郡松山町教育委員会

稗ヶ追B・稗ヶ追C・前谷B遺跡 正誤表

頁	行	誤	正
10	4~5	掛尾遺跡で	掛尾遺跡で(?)
15	6	稗ヶ追遺跡は	稗ヶ追B遺跡は
15	9	清水追遺跡は、	稗ヶ追C遺跡は、
15	9	稗ヶ追遺跡の	稗ヶ追B遺跡の
15	11	稗ヶ追・清水追遺跡に	稗ヶ追B・稗ヶ追C遺跡に
17	第5図	挿入	(赤線は施工後)
22	34	167mある。	167mである。
23	1	辺と、	片と、
26	13	測線の	測線の
28	14	刺片で	刺鏝で
27	第23図	挿入	(赤線は施工後)
28	5	同根の	同様の
28	11	a~bに	a~dに
31	25	結果5と	結果5層と
34	25	4層下が	4層土が
37	14	平坦状に	平坦面に
37	29	遺跡も	遺物も
38	4	Pit4と	Pit1・4と
38	7	古代遺構であると判断した。	古代の遺構であると判断したい。



序 文

前谷B地区が地元の強い要望で、県営畑地帯総合土地改良事業を行うにあたり、この地域は文化財の包蔵地であるので5月16日から6月16日までの開発掘調査が行われました。

こんなところにも、昔、人が住んでいたのだろうかという疑問を抱くような場所から、縄文中期土器と思われるものが出土し、浅いところで15cm、20cmというところからも出ています。しかも出土の場所が集中していることは、ここで生活していたことが十分考えられます。生活用水は、現在もこんこんとわき出ている塩御前谷の水をくんで使っていたのであろうかと想像することです。

開発か文化財保護かということが全国各地で問題になっているところが多いようです。地域住民の感情としては、以前に近くを基盤整備した時は調査もせずに簡単に工事がなされたではないかということが頭の中に強くあるようです。まだ分布調査が実施されていない前の特殊農地保全整備事業で施工された場所のことです。

10年前に、ローマ、ナポリ等に行った時に、文化財保護の徹底、厳しさには驚かされたことがあります。先人の遺跡は一度壊したら元に戻らないというのがその根拠であり、石1個の移動にも規制があるとのことでした。

我が国、本県でも遅れていた分が進むに従って前のようなことが起ってくるのでありますが、将来の農業は機械力に頼らなければ国際化の時代に太刀打ちできないでしょうし、それには基盤整備はどうしても必要になってきます。工夫、手だてによって、文化財保護、発掘をしながら工事の実施がなされることを願っているところです。

最後になりましたが悪天候の中を精力的に御指導いただいた県教育庁文化課の先生方に厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

松山町教育委員会教育長 加世田 實

例 言

1. 本報告書は、昭和63年度に実施した県営畑地帯総合土地改良事業會於東部地区（仮屋工区・前谷工区）の施工に先立つ、埋蔵文化財確認調査の報告書である。
2. 調査は県・国の補助を得て、松山町教育委員会が実施した。
3. 調査員については、県教育庁文化課職員の派遣を依頼した。
4. 本書の編集は、富田逸郎・東和幸が行い、執筆は富田が行なった。
5. 挿図中の標高は、県土地改良事業団体連合会の作図した「県営畑地帯総合土地改良事業會於東部地区（仮屋工区）現況計画平面図」「同（前谷工区）現況計画平面図」の各々のB、M、I（仮屋工区=174.596 m、前谷工区=173.944 m）を基準にした。
6. 挿図の縮尺は各々にスケールを付した。
7. 挿図の浄書は、主にその担当者が行った。
8. 遺物番号は遺跡ごとの一連番号であり、挿図・図版共通である。
9. 遺物の整理、本書の作成は県教育庁文化課収蔵庫で行った。
10. 遺物等は松山町歴史民俗資料館に保管・展示する。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経過及び組織	
第1節 調査に至るまでの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過	7
第2章 松山町の位置及び環境	9
第3章 稗ヶ迫B遺跡・稗ヶ迫C遺跡・草之瀬地区の調査	
第1節 周辺の地形及び標準土層	15
第2節 稗ヶ迫B遺跡・稗ヶ迫C遺跡の調査概要	15
第3節 稗ヶ迫B遺跡の調査	18
第4節 稗ヶ迫C遺跡の調査	22
第5節 草之瀬地区の調査	26
第4章 前谷B遺跡の調査	
第1節 周辺の地形	28
第2節 前谷B遺跡の調査概要	30
第3節 各トレンチの調査	31
第5章 総括	41

挿図目次

第1図 松山町遺跡分布図	9
第2図 松山町歴史民俗資料館展示資料—刺片尖頭器—	10
第3図 稗ヶ迫遺跡の標準土層図	15
第4図 仮屋工区周辺地形図	16
第5図 稗ヶ迫B遺跡トレンチ配置図	17
第6図 第1トレンチ土層図	18
第7図 第2トレンチ平面図・土層図	18
第8図 第3トレンチ土層図	19
第9図 第4トレンチ平面図・土層図及び土坑断面図	19
第10図 第5トレンチ土層図	20
第11図 第6トレンチ土層図	20
第12図 第7トレンチ平面図・土層図	20

第13図	稗ヶ迫B遺跡出土遺物—1—	21
第14図	第8トレンチ土層図	22
第15図	第9トレンチ土層図	22
第16図	第10トレンチ土層図	22
第17図	第10トレンチ平面図・断面図及び土層図	23
第18図	第10dトレンチ平面図・土層図	23
第19図	稗ヶ迫C遺跡出土遺物—1—	24
第20図	稗ヶ迫C遺跡出土遺物—2—	25
第21図	草之瀬地区標準土層図	26
第22図	草之瀬地区採集遺物—三稜尖頭器—	26
第23図	草之瀬地区トレンチ配置図	27
第24図	前谷B遺跡標準土層図	28
第25図	前谷B遺跡周辺地形図	29
第26図	前谷B遺跡トレンチ配置図	30
第27図	第1トレンチ土層図	31
第28図	第2トレンチ土層図	31
第29図	第3トレンチ土層図	31
第30図	第5トレンチ平面図・土層図	32
第31図	第6トレンチ平面図・土層図	33
第32図	第7トレンチ平面図・土層図	33
第33図	第8トレンチ土層図	34
第34図	第9トレンチ平面図・土層図	34
第35図	第11トレンチ平面図・土層図及び土坑断面図	35
第36図	第12トレンチ平面図・土層図	36
第37図	第13トレンチ平面図・土層図	36
第38図	第14トレンチ平面図・土層図	37
第39図	第15トレンチ平面図・土層図	37
第40図	第16トレンチ平面図・土層図及び土坑断面図	38
第41図	前谷B遺跡出土遺物—1—	39
第42図	前谷B遺跡出土遺物—2—	40
第43図	前谷B遺跡出土遺物—3—	41

写真図版目次・表目次

図版 1	43	・ 表 1	松山町及び周辺の遺跡 1	11
図版 2	44	・ 表 2	松山町及び周辺の遺跡 2	12
図版 3	45	・ 表 3	松山町及び周辺の遺跡 3	13
図版 4	46	・ 表 4	前谷 B 遺跡トレンチー一覧表	28
図版 5	47				
図版 6	48				
図版 7	49				
図版 8	50				

第1章 調査の経過及び組織

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（農地整備課・大隅耕地事務所）は、曾於郡松山町仮屋工区・前谷工区において畑地帯総合土地改良事業を計画し、実施計画区域における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会（文化課）に照会した。

文化課は昭和61年5月に分布調査を実施したところ、昭和63年度実施予定区域内に裨ヶ迫B遺跡、裨ヶ迫C遺跡、前谷B遺跡の存在していることが確認された。

この結果、県農政部農地整備課（大隅耕地事務所）、県文化課、松山町教育委員会は協議を行い、事業の推進と埋蔵文化財の保護との調整を図るため、昭和63年度に国・県の補助を得て、松山町教育委員会が確認調査を実施することとなった。費用は総事業費2,500千円で、うち国庫補助1,250千円、県費補助625千円、町費負担625千円である。

確認調査は、松山町教育委員会が調査主体となり、調査及び整理・報告書作成作業を鹿児島県教育委員会文化課に依頼した。発掘調査は昭和63年5月16日から同年6月16日まで実施し、その後整理、報告書作成作業等は県文化課重富収蔵庫において行った。

第2節 調査の組織

調査主体者	松山町教育委員会		
調査責任者	松山町教育委員会	教育長	加世田 實
調査事務担当	〃	管理課長	川上 哲郎
	〃	主査	白坂 泰雄
	〃	主査	佐野 スミ
	〃	社会教育課長	吉元 俊彦
	〃	主事	永田 史生
	〃	主事	津曲 兼隆
	〃	主事	上原 登
	〃	社会教育指導員	永山 不二夫
	〃	庶務係	別納 洋子
調査担当	鹿児島県教育委員会	文化財研究員	富田 逸郎
	〃	主事	東 和幸

なお、調査の企画等において、県教育庁文化課長吉井浩二、同課長補佐奥園義則、同主幹立園多賀生、同文化財研究員兼埋蔵文化財係長吉元正幸、同企画助成係長京田秀九の各氏のほか同企画助成係の指導助言を得た。

第3節 調査の経過

調査の経過は、日誌抄により以下略述する。

- 5月16日(月) 飯屋地区の調査開始。1 T : アカホヤまで発掘。土器片1点出土。2 T : アカホヤ上面まで発掘。柱穴2基を確認。写真撮影の後、半カットして調査。3 T : 薩摩層上面まで発掘。
- 5月17日(火) 1 T : 薩摩層下まで完掘。土層断面の写真撮影及び実測後、埋め戻し。2 T : 3基の柱穴を半カットし、写真撮影及び実測終了。3 T : シラス上面まで完掘。土層断面の写真撮影及び実測後、埋め戻し完了。4 T : アカホヤ上面で土坑状の遺構を確認。5 T : アカホヤ上面まで発掘。
- 5月18日(水) 1 T : 埋め戻し完了。2 T : 平板測量・断面実測後、埋め戻し。4 T : 土坑の発掘。5 T : 遺物・遺構無し。土層の写真撮影と土層断面実測の後、埋め戻し。6 T : VII層(サツマ層)まで発掘。7 T : V層(アカホヤ層)まで発掘。8 T : III層上面まで発掘。
- 5月19日(木) 4 T : 土坑の発掘・写真撮影・実測。土器の取り上げ。土層実測後、埋め戻し。6 T : 完掘。実測後、埋め戻し。7 T : サツマ層(VII)まで発掘。8 T : アカホヤ層(V)上面まで発掘。9 T、10 T : 発掘開始。
- 5月20日(金) 雨のため、発掘作業中止。
- 5月23日(月) 7 T : 完掘後、土層の写真撮影と実測。8 T : VI層上面まで発掘。9 T : VI層上面まで発掘。10 T : II層中に古道らしき堅緻な部分を確認。IV層から土器片出土。11 T : 表土下、シラス層。土層の写真撮影。13 T : 表土下、V層(アカホヤ層)。
- 5月24日(火) 7 T、11 T : 埋め戻し。8 T : シラス層まで完掘。遺物無し。8 b T・8 c T・8 d T : 表土下、アカホヤ層上面に芋穴を認める。9 T : サツマ層下部まで発掘。遺物無し。10 T : IV層に土器集中。10 b T・10 c T・10 d : トレンチの設定後、発掘開始。13 : サツマ層上面まで発掘。
- 5月25日(水) 8 T、8 b T、8 c T、8 d T、9 T : 土層断面実測・写真撮影後、埋め戻し。10 T : 遺物の取り上げ後、アカホヤ上面で精査。落ち込みを確認。10 b T、10 c T : 表土が深く、1 m以上はある。10 d T : 80 cmほどで、III層に達する。13 T : 薩摩層を発掘。14 T : 発掘開始。
- 5月26日(木) 10 T : 遺物取り上げ・土層断面実測。10 b T、10 c T : 地表下2 mまで客土。10 d T : IV層中に遺物を検出する。12 T : 表土直下から、アカホヤ層が真っ赤に焼けた部分を検出。弥生中期の小壺形土器と砂岩のフレークが大量に出土。13 T : シラス上面まで発掘。遺物無し。13 b T : 4ヶ所のサブトレンチを設けて発掘開始。14 T : 発掘開始。
- 5月27日(金) 10・10 b~10 d T・12~15トレンチの調査及び埋め戻し。飯屋・草ノ瀬地区

- の調査終了。前谷地区へ道具の移動。
- 5月30日(月) 前谷B地区の調査開始。各トレンチの設定及び位置の測量。3T：黄褐色粘土層の上面まで発掘。4T：黄褐色ジャリ層上面まで発掘。5T：黒色上面まで発掘。7T：表土下アカホヤ上面で、芋穴を検出。11T：表土下・アカホヤ上面で、暗黄褐色土の落ち込みを確認。土器片出土。
- 5月31日(火) 1T：発掘開始。表土直下がアカホヤ。3T：黄白色粘土まで発掘。4T：黒灰色粘土層まで発掘。ジャリ層から土器片出土。5T：黒色土・黒灰褐色土の途中まで発掘。7T：V層アカホヤ上面で土器出土。11T：トレンチを拡張して遺構を掘る。縄文晩期土器出土。
- 6月1日(水) ベンチマークの移動。1T：IV層上面まで発掘。3T、7T：完掘。土層断面実測後、埋め戻し。4T：黄白色粘土層まで完掘。5T：黒灰褐色土下の黒色土より土器片が2点出土。8T：表土剥ぎ。9T：発掘開始。表土直下アカホヤ層。11T：遺構の発掘。
- 6月2日(木) 雨のため、発掘作業中止。
- 6月3日(金) 雨のため、発掘作業中止。
- 6月6日(月) 1T、8T：サツマ層まで発掘。2T：発掘開始。ジャリ層まで発掘。4T：埋め戻し。5T：清掃と写真撮影・実測。10T：表土下シラス。
- 6月7日(火) 1T：サツマ層を発掘。2T：第2ジャリ層下面まで発掘。土器片1片出土。5T：埋め戻し。6T：発掘開始。II層・IV層に土器片出土。8T：シラス面まで完掘。9T：完掘。写真撮影。
- 6月8日(水) 1T、6T、8T、9T：完掘。12T、14T：表土剥ぎ。16T：III層上面まで発掘。午後から雨のため中止。
- 6月9日(木) 1T、8T：断面実測。6T、9T：遺物取り上げ。断面実測。11T、12T：遺物の取り上げ。14T、15T：アカホヤ上面まで発掘。16T：アカホヤ上面で、ピットを確認。
- 6月10日(金) 12T、15T：アカホヤ上面まで発掘。13T：発掘開始。II層黒色土まで発掘。14T：完掘。午後から雨のため作業中止。
- 6月13日(月) 11T：断面実測。ベルトはずし。遺構の掘り下げ。13T：アカホヤ上面まで発掘。14T：写真撮影。15T：サツマ層まで発掘。16T：ピットの発掘。遺物の取り上げ。
- 6月14日(火) 発掘調査終了。2T、12T、15T：土層断面実測。8T：埋め戻し。11T：遺構を完掘。13T：完掘。遺物・土層の実測。14T：遺物の取り上げ。土層断面の実測。16T：完掘。ピット及び土層断面の実測。
- 6月15日(水) 埋め戻し。
- 6月16日(木) 埋め戻し。

第2章 遺跡の位置と環境および周辺遺跡

1. 遺跡の位置と環境

稗ヶ迫B遺跡、稗ヶ迫C遺跡は鹿児島県曾於郡松山町大字新橋小字稗ヶ迫にあり、松山町役場の約1.5 kmのところのところに位置し、前谷B遺跡は松山町大字秦野小字前谷にあり、松山町のほぼ中央の町立秦野小学校の南約1 kmのところのところに位置している。

遺跡のある松山町は大隅半島曾於郡のほぼ中央部に位置し、東西に細長く東西12km、南北4 kmである。東は志布志町、西は末吉町、大隅町、南は有明町、志布志町、北は末吉町に境している。

経緯度は東経13度から13度7分、北緯31度37分で、町総面積は49.69 km²であり、北側は末吉町に境する宮田山520 m、南側は有明町に境する霧岳408 mが主な丘陵で、その両山地間の地域、西部、南東部は火山灰台地が発達し、その台地面を開析して、西部では菱田川とその支流、東部では安楽川の支流の尾野見川が志布志湾にむかって南流する。

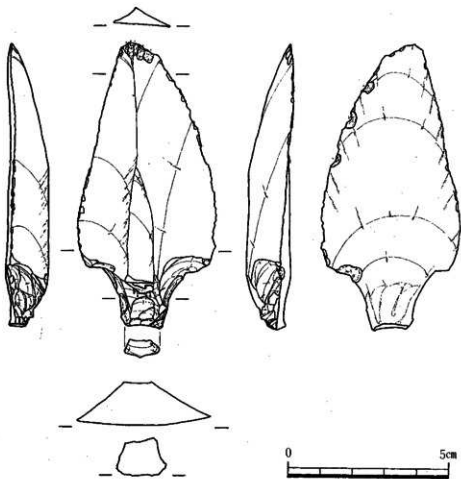
稗ヶ迫遺跡、清水迫遺跡は霧岳西部が北側へ延びるその裾部に立地している。前谷B遺跡は霧岳東部が北側へ延びる裾部に立地しており、その東には豊富な湧水があり付近の水田用水として利用されている。



第1図 松山町遺跡分布図

第2図に示した剥片尖頭器は、本町の歴史資料館の収蔵資料である。正確な出土地は不明であるが、旧石器時代の石器にまちがいないものと思われ、町内にも旧石器時代の遺跡があることが証明される。現在の所町内では旧石器時代遺跡の発掘例はないが、隣接する末吉町では掛尾遺跡で旧石器時代の包含層が確認されている。

さて、この石器は流紋岩製の剥片尖頭器である。素材となった剥片は、縦刺ぎの長三角形の剥片であり、背面右側の面は石核素材となった剥片のポジティブ面のように思われる。打面はくぼんでおり、打面調整の結果であると思われる。これは、今までに報告された県内の剥片尖頭器との大きな相違であり、石材の相違（県内の他の資料は硬砂岩製）と共に、この資料の特徴である。両側縁の打面に近いところを大きく剥離し抉入させた後、より急角度の剥離を打面に近い箇所に加え、茎部を作り出している。茎部背面にみられる剥離の一部は基部調整の剥離で切られており、素材剥片の頭部調整剥離の可能性もある。重量は45.1gである。



第2図 松山町歴史民俗資料館所蔵剥片尖頭器

表1 松山町及び近隣の遺跡一覧(番号は文献①、付図と同一、第1図は下2桁の番号)(第1図、付図参照)

番号	遺跡名	所在地	時代							遺構・遺物	文献
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
67-1	宇都谷	新橋字宇都谷		○						前平式	26
67-2	宇都D	新橋字宇都		○					○	吉田式黒曜石土師器 須恵器	26
67-3	砂田A	新橋字砂田		○						石甕式黒曜石押型文 石甕	26
67-4	中村	尾野見字中村		○						前平式	
67-5	下迫C	新橋字下迫		○						壺ノ神式総鳥産黒曜石	
67-6	榎之俣	新橋字榎之俣		○						壺ノ神式	
67-7	砂田D	新橋字砂田		○	○					甕式	
67-8	釋ヶ追C	新橋字釋ヶ追		○	○				○	甕式・土師器	26
67-9	内野野C	新橋字内野野		○						壺ノ神式・打製石斧	
67-10	新ノ谷	新橋字新ノ谷		○							
67-11	公会堂上	新橋字公会堂上		○						壺ノ神式	
67-12	野川B	新橋字野川		○						阿高式・般石	
67-13	松山	新橋字松山		○						阿高式・御器式 磨製石斧・般石	
67-14	入道久保A	新橋字入道久保		○						阿高式石斧	
67-15	内野野B	新橋字内野野		○						阿高式・磨製石斧 凹石・石甕	
67-16	横田	新橋字横田		○						阿高式・磨製石斧 凹石・石甕	
67-17	蛇山ノ谷	尾之見字蛇山ノ谷		○	○					石甕・打製石斧	
67-18	垂門A	新橋字垂門		○						市来式	
67-19	下迫A	新橋字下迫		○	○				○	御器式・土師器	26
67-20	瀬口	新橋字瀬口		○						御器式・石甕・青磁	26
67-21	河床	新橋字河床		○							
67-22	宇都A	新橋字宇都		○						松山式・石甕	26
67-23	宇都B	新橋字宇都		○					○	須恵器	26
67-24	宇都C	新橋字宇都		○						岩崎上層式	26
67-25	中村迫	新橋字中村迫		○					○	石甕・打製石斧・土師 器・須恵器	26
67-26	山ノ田	新橋字山ノ田		○					○	松山式・土師器・石甕	26
67-27	後谷A	新橋字後谷		○						榎宿式	26
67-28	上ノ原	新橋字上ノ原		○						腰式・岩崎上層式	
67-29	入道久保C	新橋字入道久保		○	○					打製石斧	
67-30	仮屋	新橋字仮屋		○					○	土師器	
67-31	釋ヶ追A	新橋字釋ヶ追		○					○	御器式・土師器	26
67-32	中山A	新橋字中山		○						黒曜石	26
67-33	壺ノ内	新橋字壺ノ内		○					○	市来式・黒曜石・土師 器	26
67-34	黒石崎	尾野見字黒石崎		○						出水式・般石・石刺	
67-35	井手段田	尾野見字中村井手段		○						岩崎上層式	
67-36	百田	新橋字百田		○						上加田式・打製石斧	26
67-37	横溝	新橋字垂門横溝		○					○	磨製石斧・土師器	26
67-38	敷ノ原B	新橋字敷ノ原		○					○		
67-39	大原	新橋字大原		○	○				○	入来式・土師器	
67-40	壺ノ谷	新橋字後谷		○					○	土師器	
67-41	水流知	新橋字水流知		○					○	土師器	
67-42	蔵野	新橋字蔵野		○					○	土師器・打製石斧	
67-43	入道久保B	新橋字仮屋		○					○	土師器・須恵器	
67-44	釋ヶ追B	新橋字釋ヶ追		○						磨製石斧	
67-45	中山B	新橋字中山		○	○					入来式	26
67-46	黒石口	尾野見字黒石		○							
67-47	敷ノ段	新橋字敷ノ段		○							

表2

番 号	遺跡名	所 在 地	時 代						遺構・遺物	文献
			旧石	縄文	弥生	古墳	古代	中世		
67-48	井手関	新橋字井手関		○						26
67-49	魁木	新橋字魁木		○				○	土師器・青磁・鉄片	
67-50	大窟B	新橋字大窟壘門		○				○	土師器	
67-51	後谷B	新橋字後谷		○						
67-52	前ノ谷	新橋字後谷		○						
67-53	前谷	新橋字前谷		○						8
67-54	砂田C	新橋字砂田		○				○	土師器	26
67-55	黒石I	尾野見字黒石		○						
67-56	豊留	新橋字豊留			○				打製石片	
67-57	大窟A	新橋字大窟			○					26
67-58	狩川A	新橋字狩川			○				打製石片・磨製石片・ 砥石	
67-59	内野野A	豊野字内野野			○				石片・石鏃	
67-60	柿木瀬戸	豊野字柿木瀬戸			○				打製石片	
67-61	六日塚	尾野見字六日塚			○				山ノ口式・打製石片	
67-62	中村手関	尾野見字中村手関			○				打製石片	
67-63	鳩塚	尾野見字鳩塚			○				山ノ口式	
67-64	井手段I	尾野見字中村井手段			○					
67-65	砂田B	新橋字砂田			○					
67-66	川路	新橋字川路			○				打製石片・石鏃	
67-67	栗畑田	新橋字栗畑田			○					
67-68	尾野見	尾野見			○					
67-69	桐ノ木	尾野見字桐ノ木			○					
67-70	瀬戸地下式 横穴	豊野字柿木瀬戸				○			地下式横穴	
67-71	竹下	新橋字竹下					○		土師器・須恵器・青磁	26
67-72	四ツ枝	新橋字四ツ枝					○		土師器・須恵器・青磁	
67-73	壘門C	新橋字壘門					○		土師器	
67-74	下迫B	新橋字下迫					○		土師器	
67-75	牧ノ原A	新橋字牧ノ原					○		土師器	
67-76	豊留	新橋字豊留					○		板碑	
67-77	後谷C	新橋字後谷								
67-78	狩川C	新橋字狩川					○		須恵器	
67-79	清水道	新橋字清水道					○		土師器	
67-80	川東	豊野字川東					○		土師器・須恵器	
67-81	豊留	新橋字豊留						○	田之神像	
67-82	壘門B	新橋字壘門			○		○		土師器	
67-83	前之窟	新橋字前之窟			○		○		土師器	26
67-84	豊野城跡	豊野字前之塚								
67-85	松山城跡	新橋字松尾							文治4年(1188年) 陸奥守藤原朝宗松山 川要寄地	
67-86	銭ヶ追一里塚	桃木銭ヶ追								
67-87	船大門権四郎 の墓	尾野見								
67-88	中塚一里塚	尾野見								
67-89	豊野の石敢当	豊野								
67-90	鳥嶋の庚申塔	新橋鳥嶋								
67-91	豊留の 田之神像	新橋豊留								
67-92	豊留の板碑	#								
67-93	前谷B	豊野								

末吉町

番号	遺跡名	文献
66-1	唐之森中学校校庭	
66-3	花房	
66-4	新田山第1	
66-8	柿木下田区	
66-13	南富田	
66-14	荒神免	
66-15	荒神免古墳	
66-20	竹有原	
66-21	大跡	
66-22	原村第1	
66-31	上桑島	
66-33	原村第2	
66-34	まのせ	
66-35	原村	
66-36	屋敷寺	
66-46	坂元	
66-47	新田山第2	
66-48	中原	
66-49	藤ヶ迫	26
66-50	藤原一平一石墓塚	
66-53	岩野本谷五輪寺	
66-55	板谷天の岩戸	
66-75	花房製鉄所跡	
66-107	熊原	
66-109	西原	26
66-111	本堂	
66-115	柿の木野久尾A	
66-120	赤尾	7
66-121	掛尾	7
66-122	山ノ根	
66-123	土合原1	
66-124	土合原2	
66-125	土合原3	
66-126	未名	

志布志町

番号	遺跡名	文献
68-2	藤石橋	
68-6	牧原	24
68-7	内門	24
68-8	白木原	24
68-9	大長野	24
68-10	宮谷口	24
68-11	本村	24
68-12	小牧	24
68-13	蔵原	24
68-14	中迫	24
68-18	上原	24
68-19	中原	24
68-20	西中畑	24
68-21	横野	24
68-22	下原A	24

*欠番は付図の範囲外にある遺跡

番号	遺跡名	文献
68-23	長尾	24
68-24	横尾A	24
68-25	横尾B	24
68-26	横輪	24
68-27	柳	24
68-42	出口	24
68-45	家野	24
68-46	松崎	24
68-48	牧	24
68-67	道重	24
68-71	吉原	24
68-72	牧野	24
68-73	出口	24
68-74	立花迫	24
68-79	片野洞穴	24
68-82	倉野	24
68-83	板山	24
68-84	白木八重	24
68-85	大越	24
68-86	小牧	24
68-87	小迫	24
68-88	山久保B	24
68-96	浜場	24
68-99	山形	24
68-100	今別府	24
68-101	上畑野	24
68-102	橋之口	24
68-120	山久保A	24
68-121	上出水	24
68-122	橋ノ口	24
68-123	宮ヶ中	24
68-124	下原	24
68-125	森山	24
68-126	平原A	24
68-127	平原B	24
68-128	平山	24
68-129	上原	24
68-130	下原B	24
68-131	礼達	24
68-138	上佐野原	
68-146	田吹野	24
68-149	佐野	24
68-185	宮谷A	
68-186	宮谷B	
68-187	尾口	

有明町

番号	遺跡名	文献
69-1	御井谷	26
69-2	松ヶ尾	26
69-3	上ノ原B	26
69-4	高瀬田	
69-5	井崎田鍋	

番号	遺跡名	文献
69-6	飯屋A	26
69-8	室太郎	
69-11	芝ヶ谷B	
69-15	黒墓A	
69-16	いせんぼ	
69-18	飯屋跡	

大隅町

番号	遺跡名	文献
63-9	山神	26
63-14	久保崎田	
63-19	久保崎IV	
63-21	靱原	
63-22	市	
63-33	八合原	
63-35	靱原II	
63-47	稲藪崎	
63-48	板迫I	26
63-66	竹山I	
63-67	下ノ山	
63-71	市原I	
63-73	坂之上	
63-84	前塚	
63-79	大田尾	
63-80	城ヶ迫	
63-83	宮原	
63-85	猪子平	
63-88	靱原I	
63-90	市原II	
63-91	市原田	
63-104	山ノ口	
63-105	鳴神	
63-106	境木	
63-107	山段	
63-108	上八合	
63-109	志野牧	
63-110	真迫	
63-112	下ノ山	
63-126	中馬場溝	
63-128	竹山II	
63-129	志野	
63-130	板迫II	26
63-134	西之瀬	
63-151	元瀬歌	
63-169	瓦崎城跡	
63-170	新城城跡	
63-171	月野城跡	
63-172	土成城跡	
63-176	月野城跡	
63-178	若松石見守の墓	
63-197	松尾田城	
63-198	広津田城	

文 献

- (1) 【鹿兒島県市町村別遺跡地名表】鹿兒島県埋蔵文化財報告書(36) 1985.3 鹿兒島県教育委員会
- (2) 【中岳洞穴】1980.3 末吉町教育委員会
- (3) 【宮の迫遺跡】末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1981.3 末吉町教育委員会
- (4) 【箱根遺跡・前畑遺跡・真方入口遺跡・通山上川遺跡・野田後遺跡】末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985.3 末吉町教育委員会
- (5) 【上中段遺跡・仮牧遺跡・五位塚渡り下遺跡・下ノ塚遺跡・小中野下原遺跡】末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1986.3 末吉町教育委員会
- (6) 【西杖道遺跡・楠木岡遺跡・中牛牧遺跡】末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1987.3 末吉町教育委員会
- (7) 【赤尾遺跡・掛尾遺跡】末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1988.3 末吉町教育委員会
- (8) 【前谷遺跡】松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1986.3 松山町教育委員会
- (9) 【宮ノ前遺跡】1975.3 志布志町教育委員会
- (10) 【別府(石圃)遺跡】1975.3 志布志町教育委員会
- (11) 【野久尾遺跡】1979.3 志布志町教育委員会
- (12) 【弓場ヶ尾地区(箕輪遺跡・柳遺跡)】1980.3 志布志町教育委員会
- (13) 【柳井谷遺跡概報】1983.3 志布志町教育委員会
- (14) 【倉園B遺跡・十文字遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1983.3 志布志町教育委員会
- (15) 【柳井谷遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1984.3 志布志町教育委員会
- (16) 【倉園B遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1984.3 志布志町教育委員会
- (17) 【井手平遺跡・池野遺跡・八部ヶ野A遺跡・八部ヶ野B遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 1984.3 志布志町教育委員会
- (18) 【中原遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1985.3 志布志町教育委員会
- (19) 【戴園A遺跡・土光遺跡・風穴遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 1985.3 志布志町教育委員会
- (20) 【山久保A遺跡・山久保B遺跡・戴園遺跡・中迫遺跡・西中畑遺跡・小迫遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1986.3 志布志町教育委員会
- (21) 【出口B遺跡・湧ヶ野遺跡・東原遺跡・檜野遺跡・上原遺跡・平原A遺跡・平原B遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 1987.3 志布志町教育委員会
- (22) 【飛渡遺跡・島田遺跡・白木原遺跡】志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 1988.3 志布志町教育委員会
- (23) 【札元遺跡・山原遺跡】有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1985.3 有明町教育委員会
- (24) 【志布志の埋蔵文化財一周知の遺跡詳細分布状況】1985 志布志町教育委員会
- (25) 【大隅地区埋蔵文化財分布調査概報】鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書(25) 1983.3 鹿兒島県教育委員会
- (26) 【大隅地区埋蔵文化財分布調査概報—昭和58年度—】鹿兒島県埋蔵文化財調査報告書(29) 1984.3 鹿兒島県教育委員会

第3章 稗ヶ迫B遺跡・稗ヶ迫C遺跡・草之瀬地区の調査

第1節 周辺地形及び標準土層

本町は宮田山と霧岳を結ぶラインで、菱田川水系と安楽川水系とにわかれるが、この章で述べる仮屋工区は、霧岳山麓の菱田川水系によって開析された谷に挟まれた緩傾斜の頂部をもつ尾根上にある。

稗ヶ迫遺跡はこのような尾根の末端に立地しており、北東へやや緩い傾斜をもつ。この緩傾斜面がある程度削平されて畑として利用されており、包含層の遺存は良好でない。畑地から下は急傾斜となり、谷底の水田へと続く。谷頭には現在湧水はないものの、湿地である。

清水迫遺跡は、稗ヶ迫遺跡の南にあり、この一連の尾根が一番狭小となる場所である。東西は急傾斜となり谷底へと続く。この2つの谷には現在湧水がある。

草之瀬地区はこの尾根と山腹の遷移する場所で、稗ヶ迫・清水迫遺跡に比べやや傾斜が強い。

この尾根の土層は第3図に示すとおりで、以下略述する。なお草之瀬地区については、削平が著しく、アカホヤ層より上位の層はなかったため第22図に別掲した。

1層：現耕作土であり、淡黒褐色の砂壤土で、ボラは視認できなかった。

2層：黒褐色を呈する埴壤土で、3層に漸移する。

3層：暗黄褐色を呈する埴壤土で、2層からの漸移が終わるところに、黄橙色の径0.5～1cmの軽石が認められる。4層にも漸移する。

4層：茶褐色を呈する埴壤土で、3層に近い箇所はやや明るい、5層とのライン付近にはやや強い腐食質が認められる。

5層：上位は黄褐色を呈する固く締った埴壤土で、4層との境ではブロックが浮いたり、クラックが入ったりする。下位は黄褐色を呈する軟弱な壤土で、バミスがみられる。アカホヤ層と思われる。

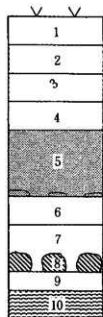
6層：明茶褐色の固く締った埴壤土である。

7層：暗褐色を呈する固く締った埴壤土である。

8層：明黄褐色を呈する固く締った埴壤土でよりシルトに近い。薩摩層と思われる。

9層：明茶褐色を呈するソフトローム層である。他の地域に比べ、腐食質の発達が弱い。

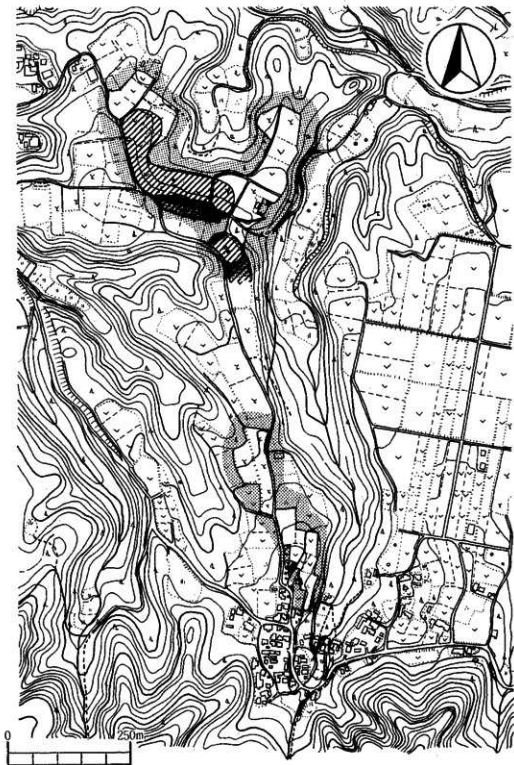
10層：淡黄褐色から乳白色のソフトローム層で、「ヌレシラス」と呼ばれるシラスの二次堆積層である。



第3図 稗ヶ迫遺跡
標準土層図

第2節 稗ヶ迫B及び同C遺跡の調査概要

調査対象地域内に第5図に示すような配置で、第1～11トレンチを

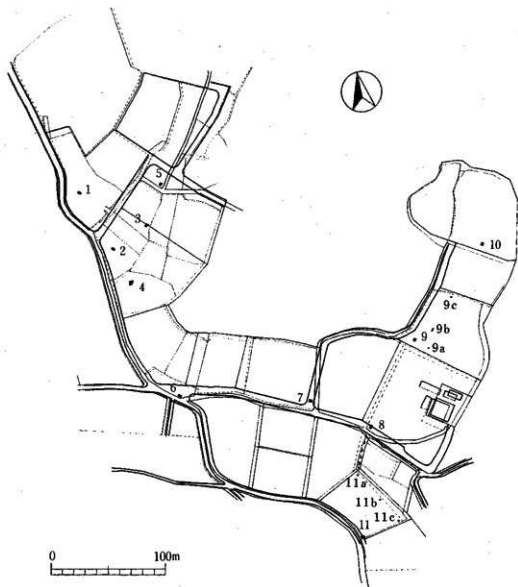


第4图 饭屋工区周边地形图

設定し、遺跡の性格及び範囲の確認に努めた。そのあらましは表2に示すとおりで、それぞれの範囲は第4図中の斜線部である。

稗ヶ迫B遺跡は弥生中期を主体とする遺跡で、従来よりも南に広がり、先に述べたように谷頭兩岸に広がるものと思われる。

稗ヶ迫C遺跡は縄文時代中期を主体とする遺跡で、尾根の先端部は開墾による削平のためその広がり疑問であるものの、尾根の基部側に広がる可能性がある。



第5図 稗ヶ迫遺跡トレンチ配置図

第3節 神ヶ迫B遺跡の調査

第1トレンチ

付近の最高所（第4トレンチ周辺）から8m程低い北向きのテラス状になった場所に設定したトレンチである。

土層の堆積状況は安定しており、各々の層も割と厚い。特に5層は厚く、1m近く堆積している。

いずれの層からも遺物の出土はみられなかった。

第2トレンチ

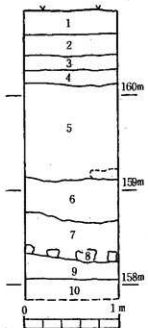
付近の最高所である第4トレンチと第1トレンチの中間に設けたトレンチで、幾分か傾斜した場所に設定したトレンチである。

3層・4層の堆積はみられず2層の黒褐色土の直下に5層アカヤ層がある。この5層上面で柱穴のようなビットを3個検出した。これを半截して観察したが、埋土は上下とも一枚の褐色の埴壤土で、径及び底面形状にも斉一性はみられず、柱穴とは判断できない。

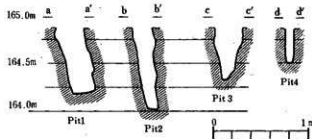
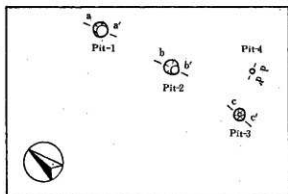
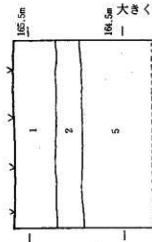
2層中及びビット埋土中からの出土はない。

第3トレンチ

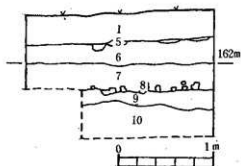
第2トレンチからほぼ北東の緩斜面の端近くで、さらに東、北は大きく一段低くなるような箇所を設定したトレンチである。



第6図 第1トレンチ土層図



第7図 第2トレンチ平面図・土層図

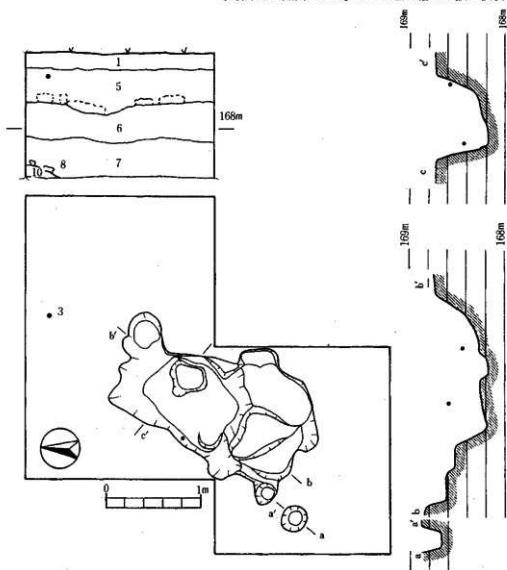


第8図 第3トレンチ土層図

1層直下には5層のバミスがブロック状にみられるほど、削平が著しかった。6層以下は安定した堆積である。遺物はどの層からも出土しなかった。

第4トレンチ

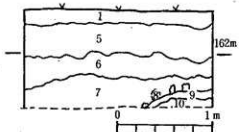
付近の最高所に設定したトレンチであり、ある程度の削平を予期していたが、5層下部以下は残っていた。表土除去後第9図に示すような土坑が検出され、土坑外から3の土器が、土坑内から縄文時代晩期の土器の小破片が2点出土した。3の土器は幅1cm強の板状工



第9図 第4トレンチ平面図・土層図及び土坑断面図

具による綾杉文と横位の貝殻刺突線をもつ。内面はヘラ削りであり、このような文様、器面調整の特徴などからは縄文時代早期の土器のようであるが、出土層位はアカホヤ中からであり、断定はできない。

土坑についても、その時期、性格等を明らかにする材料はない。



第10図 第5トレンチ土層図

第5トレンチ

標高は162 m程で、尾根頂部の緩斜面が、谷への急斜面に変わる箇所に設けた。

5層より上は削平によって欠失し、また8～10層は谷の方向へ急激に落ち込んでいた。

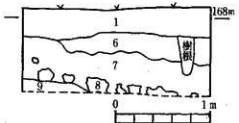
第6トレンチ

谷頭に設けたトレンチで、柵ケ追B遺跡と同C遺跡が一続きになるかどうかを確認しようとしたが、5層以上が削平されており目的は達せられなかった。

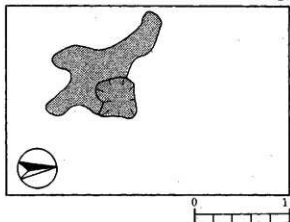
6層以下も遺物の出土はなく、9層は谷へ急激に落ち込んでいる。

第7トレンチ

表土直下で5層があらわれ、焼土と思われる、炭化粒を含む赤化した5層土が第12図中網掛けの範囲に検出された。さらにその中に樹根状のピットがあり、上



第11図 第6トレンチ土層図



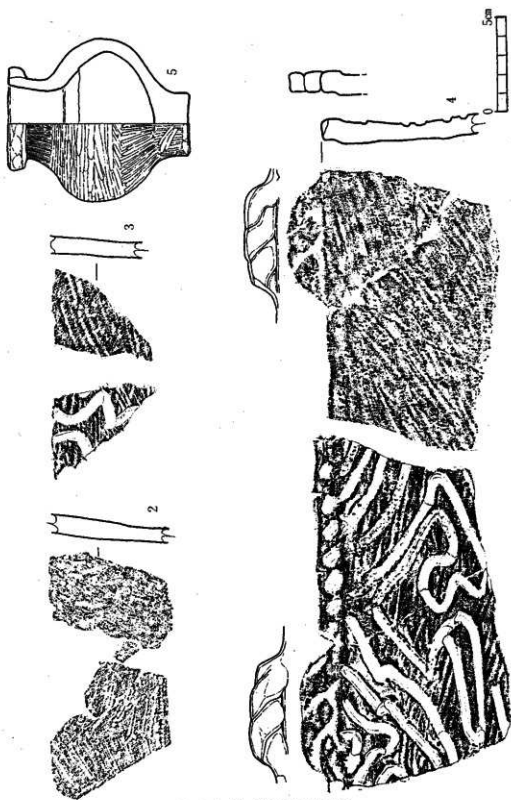
第12図 第7トレンチ平面図・土層図

位に第13図5の土器と砂岩の剥片が多数出土した。

砂岩の剥片は、赤化しかつ一部の剥片には煤様のものも染み込んでおり、熱破砕によるものと思われる。

5は弥生時代中期初頭の特徴をもつ小型壺形土器である。

口縁部は逆L字状をなし、最大径は全体の中程にある。表面はヘラで丁寧に磨かれ、黒褐色を呈する。器高9.6cm、最大径8.6cm、口縁直径5.4cm、口縁内径4cm、底径3.4cmを測る。

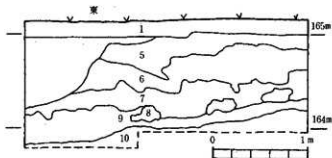


第13図 稗ヶ迫B遺跡出土遺物

第4節 神ヶ迫C遺跡の調査

第8トレンチ

草之瀬地区からの一連の尾根から分岐する支尾根の基部に設けたトレンチである。この支尾



第14図 第8トレンチ土層図

根はここから北の方へ、なだらかに傾斜しながら続き、東の流水のある谷と西の浅い谷に挟まれている。

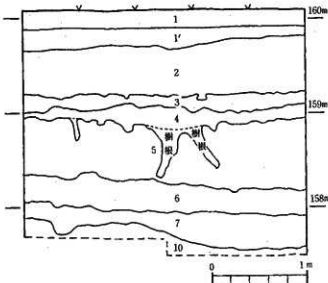
土層は不安定な堆積を示し、5～9層は線引きに困難をきたすほどでかつトレンチ北側には5～7層土の入り交じった土の落込みがみられた。遺物の出土はない。

第9トレンチ

第8トレンチから約5m下にあり、この一連の支尾根はこの辺りからテラス状になる。

土層は幾分か傾斜しながらも安定した堆積をみせるが、遺物の出土はみられなかった。

また、同一の畑にサブトレンチを設け、遺物包含層を追求したが同様であった。



第15図 第9トレンチ土層図

第10トレンチ

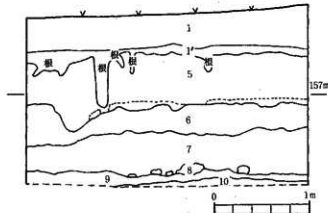
支尾根の先端の畑に入れたトレンチで、第9トレンチよりも約2mほど低い場所に設けた。

土層の堆積は第9トレンチと似たようなものであるが、4層より上の層は削平されている。遺物の出土はない。

第11トレンチ

草之瀬地区からの一連の支尾根が最もくびれる箇所に設けたトレンチで、標高はほぼ167mある。

2層下部で土師器の小破片が2



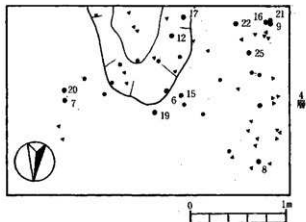
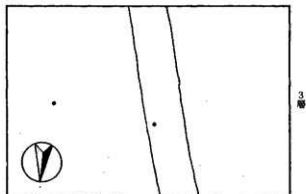
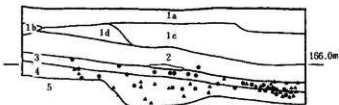
第16図 第10トレンチ土層図

辺と、3層上面で幅40cmほどの古道と思われる固く踏みしめられた灰～白色の粒子を多量に含む土層が帯状に検出された。土師器片は図化しえないほどの小破片であり、時期判断の材料にもならない。

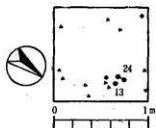
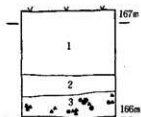
3・4層では第19・20図の13・23・24以外の土器が、また5層に掘り込まれた土坑は全部を発掘できなかったが深さは約30cmほどで、短径は約1m、長径は不明である。埋土は土坑外の4層土とほとんど区別できないもので、また遺物も土坑外のものと同様ではない。この性格等はまったく不明である。

8～25の土器は、内外面とも貝殻炭痕を施すものである。8は指頭による太めの凹線文を施し、9は先端が平らな工具による凹線文である。10～15はヘラ状工具による沈線を施す。

全形を知ることができる資料はないが、各部位の特徴から縄文時代中期に位置づけられる。



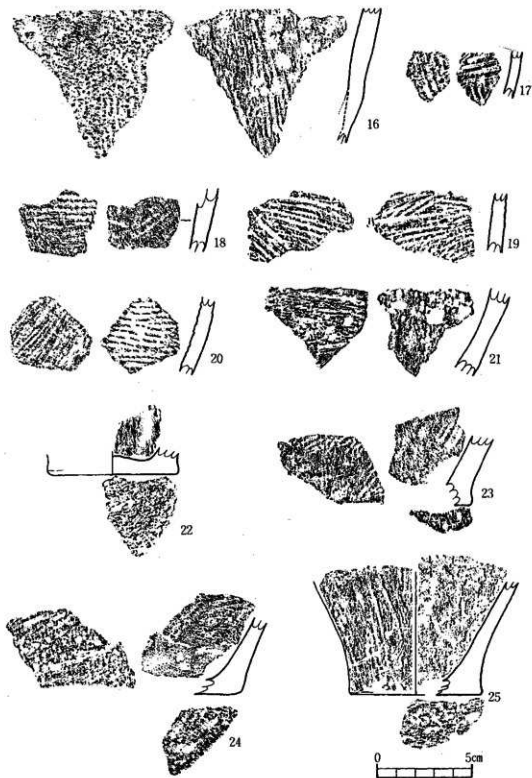
第17図 第10トレンチ平面図・土層図



第18図 第10dトレンチ平面図・土層図



第19図 神ヶ迫C遺跡出土遺物-1-



第20図 稗ヶ迫c遺跡出土遺物—2—

第5節 草之瀬地区の調査

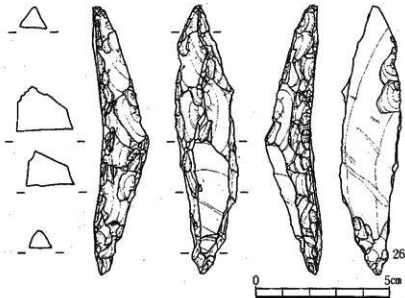
草之瀬地区では昭和61年度の分布調査の際遺物の散布がみられたので、今回確認調査を行うこととなったのであるが、第21図に示すような配置で第12～15、13a～bの各トレンチを設け包含層の確認に努めたが、全てのトレンチにおいて、遺物は出土しなかった。

なお、ここの標準的な土層は第23図に示すとおりである。

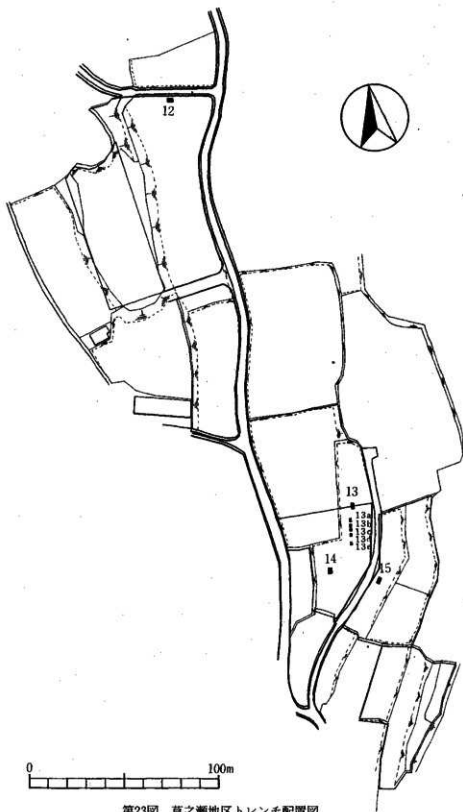


第21図 草之瀬地区標準土層図

1層：現耕作土である。2層：固くしまった黄褐色埴壤土で、アカホヤ層である。全てのトレンチでこの層より上は削平されている。3層：明褐色の固くしまった埴壤土。4層：暗褐色を呈する埴壤土。5層：明褐色を呈する固くしまった埴壤土で、クラックで分断されたり、連続するブロックで堆積する。6層：淡茶褐色のソフトロームである。7層：シラスの二次堆積層でやや粘性があり、淡黄色を呈する。第22図は、13dトレンチのすぐ脇で採集した三稜尖頭器で、素材は硬質頁岩の横刺ぎ剥片である。基部は腹面も調整されており、それが測縁のブランティング状剥片で切られている。重量は38.4gである。



第22図 草之瀬地区採集遺物—三稜尖頭器—



第23図 草之瀬地区トレンチ配置図

第4章 前谷B遺跡の調査

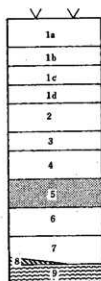
第1節 周辺の地形と標準土層

前谷B遺跡は、霧岳の北山麓から延びるなだらかな傾斜の頂部をもつ尾根上及びその西斜面に立地する。調査対象となった前谷工区は、前谷B遺跡の立地する尾根と、浅く緩やかな斜面をもつ谷とさらにもう一本の同根の尾根とにまたがる。この谷はもともと2本あったが、西側の谷は江戸末期から明治初期の土石流で埋没したらしい。この谷には現在、流水・湧水ともみられないが、遺跡の東側の谷には流水があり、その谷頭には湧水も見られる。

標高は170 m前後で、尾根上は安定した土層である。

標準的な土層は、尾根上が多いため、谷部の第5トレンチで安定した土層がみられるので、これを基にした。第24図がそれであり、以下各層について略述する。

- 1層：茶褐色の壤土で、現耕作土である。谷部では夾雑物及び色調でa～bに細分される。
- 2層：暗黒褐色の埴壤土で、1層との境はシャープに現れる。
- 3層：淡灰褐色の埴壤土であるがよりシルトに近い。
- 4層：黒褐色の埴壤土で、この層の下部及び5層上部から遺物が出土する。3層、5層とは漸移する。なお2から4層が分離できるのは谷部のみで、尾根斜面及び尾根上では分離できない。特に3層は谷部以外では視認できない。この層の下部で遺物が出土する。
- 5層：黄褐色の埴壤土で、上部は4層の染み込みでやや黒ずみ、下部は明黄褐色を呈し、所所でバミスがみられる。アカホヤ層とおもわれる。
- 6層：黒褐色の埴壤土で、5層、7層とは漸移する。
- 7層：黒褐色の埴壤土で、8層及び9層と漸移する。



第24図 前谷B遺跡標準土層図

表4 前谷B遺跡トレンチ一覧表

トレンチNo	面積	包含層の位置	遺物の層	表土(表下)の土層	出土遺物・遺構	備考
1	6㎡	無	無	5層		
2	6㎡	#	#	1b層		1b層は旧表土
3	6㎡	#	#	2a		2a層は土石流堆積
4	6㎡	#	#	2a		#
5	6㎡	有	#	1b層	縄文土器	1b層は旧表土 包含層まで-180cm
6	6㎡	#	#	2層		包含層まで-40cm
7	6㎡	#	#	2層	縄文土器	包含層まで-40cm
8	6㎡	無	#	5層		
9	6㎡	#	#	5層		
10	6㎡	#	#	シラス		
11	12㎡	有	有	2層	土坑・縄文土器(晩期) 石碁	包含層まで-20cm
12	6㎡	#	無	2層	縄文土器	包含層まで-20cm
13	9㎡	#	#	2層	#	包含層まで-50cm
14	6㎡	#	#	5層		包含層まで-20cm
15	6㎡	無	#	5層		
16	6㎡	有	有	2層	柱穴・弥生土器・縄文土器	包含層まで-50cm
81㎡	8ヶ所		2ヶ所			



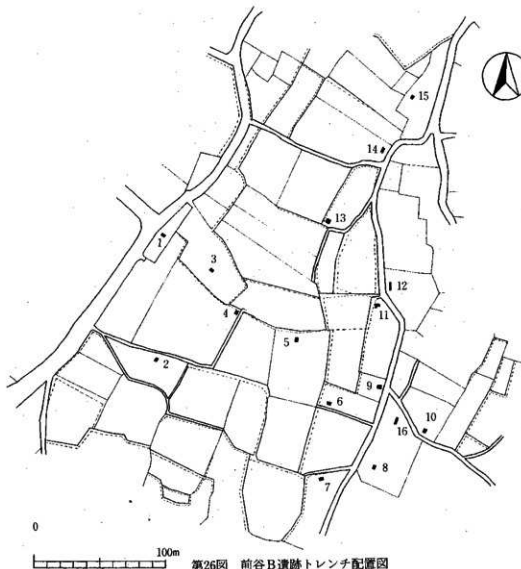
第25図 前谷B遺跡周辺地形図

8層：やや灰色がかった黄褐色を呈する埴壤土であるが、よりシルトに近い。桜島起源の薩摩層と思われる。

9層：いわゆるヌレシラス層で、明茶褐色から明黄茶褐色がかった乳白色を呈するシルト層である。なお、他の地域ではこの層の上位に茶褐色から暗茶褐色のフソトローム層がみられるが、前谷B遺跡では確認されなかった。

第2節 前谷B遺跡の調査概要

調査対象地域内に、第26図に示すような配置で第1から16トレンチを設け、遺跡の性格及び範囲の確認に努めた。そのあらまは表4に示すとおりであるが、その結果、縄文時代晩期を主体とする遺跡で、第25図中斜線で囲った範囲に広がるものと推定された。



第26図 前谷B遺跡トレンチ配置図

なお、トレンチを設定した基準は、工事によって掘削される箇所及び、幹線道路予定地であるが、掘削箇所であっても、近接するトレンチの状況によってはトレンチを設けなかった箇所もある。

第3節 各トレンチの調査

第1トレンチ (第27図)

東側の尾根筋に設けたトレンチで、標高は175 mである。5層中位より上は削平されてお

り、6層以下にも若干の土層の乱れがあり、かつ谷へ傾斜している。

遺物の出土はない。

第2トレンチ (第28図)

急斜面の山腹から緩斜面の尾根への遷移点近くで、テラス状の地形を呈する箇所に設けたトレンチである。

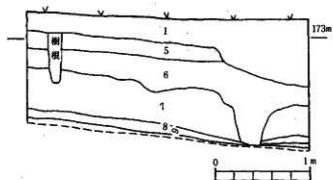
土層は北へ若干下がる傾斜をもつ安定した堆積状況である。なお、第28図中2 a層としたのは標準土層と同一層で、2 b層としたのは砂礫層である。この層は、径3~1 cmほどの細かい礫が主体となり、拳大の礫や部分的な砂層(図中一点鎖線)を含む。また5層とした層は、アカホヤと思われる埴壤土を交える礫層で、上下の層の特徴を標準土層に当てはめた結果5としたものである。

遺物の出土はない。

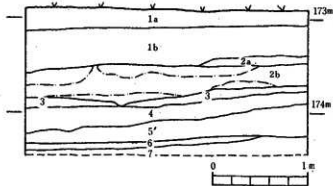
第3トレンチ

谷部の標高169 mほどの箇所に設けたトレンチである。

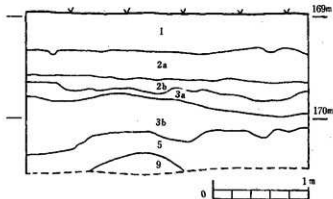
土層は不安定な堆積を示し、2 a層、2 b層は第2トレンチと同じで、3 a層は多量の礫(径1~3 cm)を含む淡褐色埴壤土で3 b層は少量の礫を含む淡褐色埴土である。



第27図 第1トレンチ土層図



第28図 第2トレンチ土層図



第29図 第3トレンチ土層図

また5層も幾分砂っぽく、6～8層は欠失し、9層のシルティなヌレシラスが中央に盛り上がっている。遺物の出土はない。

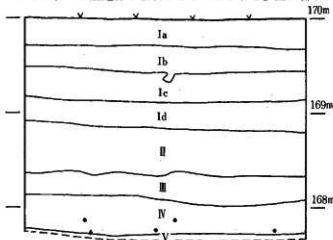
第4トレンチ

谷部のほぼ中央に設けたトレンチで、埋没した谷に当たると思われる。表土下は淡褐色の砂礫層が、部分的に拳大の礫層、人頭大の礫、粗砂層とを挟みながら堆積しており、約2.5 m掘ってもこの層が続き、より以上の発掘を断念した。

この砂礫層中からローリングを受けた土器片が1片出土したが、この堆積時に一緒に流されてきたものと思われる。

第5トレンチ

東尾根下の谷底に設定したトレンチで、この谷の傾斜はこの付近からは緩くなる。土層は安定した堆積状況を示しており、ほぼ水平な層界をみせる。1層は1m以上堆積しており、現耕作土層下は明黒褐色砂壤土(1b)、暗黒褐色砂壤土(1c)、暗褐色砂壤土(1d)と細分されるが、ボラ層起源の軽石が1bにはわりと多量に含まれていること、土質そのものは1a～

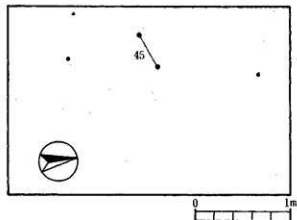


1dとも同様であることから土層として一括されるものと判断した。2は黒色のシルトで、1層との境は鮮明であるが、3層とは漸移する。3層は明茶褐色シルトで上下の層に漸移する。4層は黒色シルトであるが、2層よりやや茶色がかかる。5層は黄褐色埴壤土で、他のトレンチの5層よりもシルティな感じがする。

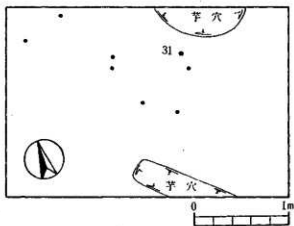
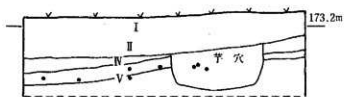
このうち4層下部から第42F45の土器の他少数の土器、石片が出土している。

45の土器は、外面は貝殻腹縁、内面は刷毛目による器面調整が施され、色調は淡赤褐色を呈し、胎土に石英・長石・軽石・火山豆石などを含む。縄文時代晩期のものと思われる。

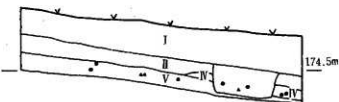
また他の土器も胎土・器面調整等から、縄文時代晩期のものと思われる。



第30図 第5トレンチ平面図・土層図



第31図 第6トレンチ平面図・断面図



第32図 第7トレンチ平面図・土層図

第6トレンチ

尾根斜面の谷の近くに設けたトレンチで、頂部よりも2m程低く、谷底よりも3m程高い箇所である。畑の削平等により現況では一見テラス状の地形を呈するが、土層は谷への傾斜がある。

しかし、傾斜するものの層の乱れはみられず、4層下部では8点の土器片も出土した。

第41図31はその内の1点で、縄文時代晩期の浅鉢の頸部と思われる。内面の磨痕は残るが、外面の調整は風化のため不明である。

他の土器もほぼ同時期と思われる。

第7トレンチ

谷頭に近い尾根斜面に設けたトレンチで、第6トレンチより約50m上流で1m程高い箇所である。

土層の状況も第6トレンチとよく似ており、遺物も4層から同じ縄文晩期のものと思われる土器が出土した。

第8トレンチ

山腹と緩斜面の尾根との遷移点に近い箇所に設けたトレンチで、比較的傾斜は急な箇所である。

4層よりも上位の層は削平により欠失しており、また8層の薩摩層、9層のソフトロームの堆積はみられない。

遺物は出土しなかった。

第9トレンチ

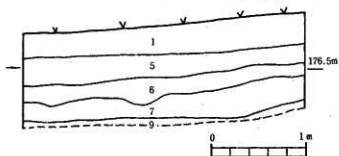
尾根頂部の平坦面に設けたトレンチで、第6トレンチの上方約2mの箇所である。現況では平坦面であるが、これは開墾・耕作等による削平のため5層より上位の土層が欠失した結果であると思われる。5層以下は西へ若干の傾斜はあるもののほぼ平坦な堆積を見せる。なお、8・9層の堆積はみられず、7層下にシラス層がみられる。

なお、5層上面に黒曜石の破片が出土したが、図化するにいたらなかった。

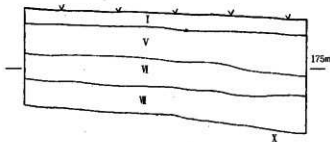
第10トレンチ

第8・9・16トレンチなどを設けた尾根の東斜面下で、東側の谷の谷頭部に設けたトレンチである。南側はすぐに急斜面の山腹となる箇所、第9トレンチとの比高は約2mである。

表土下はすぐにシラスで、表土にも遺物は検出されなかった。



第33図 第8トレンチ土層図



第34図 第9トレンチ平面図・土層図

第11トレンチ

第9トレンチ辺りから平坦となる尾根がさらに一段下がり始める箇所に設けたトレンチである。

標高は175.0 mで、幾分か西へ傾斜する畑地である。このトレンチのすぐ西に耕作道路があり、この道路のため畑は約1m段落ちする。

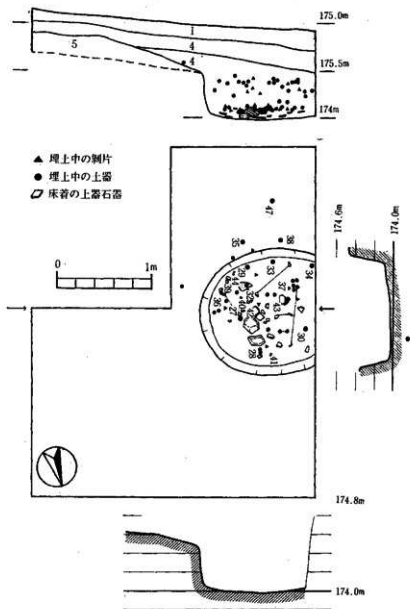
このトレンチでは第35図に示すような土坑が1基検出された。

短径1.3 m、長径1.6 m程の楕円形を呈し、深さは0.4 m底面は平坦で、5層中にとどまっている。

埋土は4層下がやや濁ったような色調を呈し、弥生土器・縄文土器の小破片を含む。レンズ状堆積などは確認できず土坑の肩よりやや上位から底面まで一様であり、細分することはできなかった。

底面に接して出土した遺物は27・40・42などの縄文晩期土器と小児の頭くらいの大きさの砂岩の亜角礫、花崗岩製の磨石、焼けた拳大の亜角礫である。

これらの遺物から、この土坑の使用された時期は縄文時代晩期と思われる。性格については今後の類例の増加及び類例の比較検討を待ちたい。



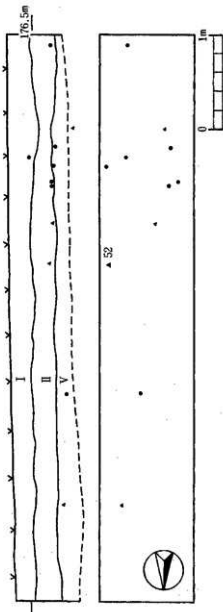
第35図 第11トレンチ平面断面図及び土層図

第12トレンチ

第11トレンチよりも1.5 m程高くなった尾根頂部に細長く設定したトレンチである。現況は杉林で、ほぼ平坦に整地されており、植林以前は畑であったらしい。

土層は、尾根頂部という地形のためか3・4層は堆積しておらず、2層下に5層が堆積しているものの、ほぼ平坦な堆積状況である。

遺物は52の砂岩の偏平な小礫を利用した磨石の他、縄文晩期土器の小破片が出土したが、図化するにはいたらなかった。



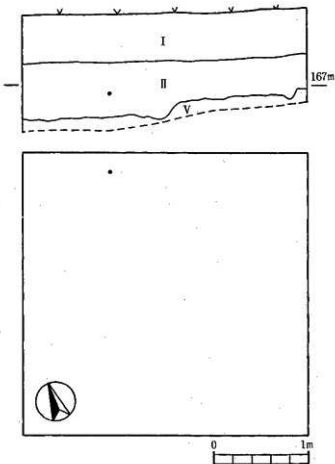
第36図 第12トレンチ平面図・土層図

第13トレンチ

第5トレンチの下流約100 mのところ、比高差もほとんどない箇所である。

土層は3・4層が欠失しており、また2層と5層の境も波を打つような堆積状況である。

2層中に土器の小破片が1点出土した。



第37図 第13トレンチ平面図・断面図

第14トレンチ

尾根の末端部に設けたトレンチで、標高は165 m程の地点である。開墾・耕作による削平のためか、2から4層は確認できず、表土下はすぐに5層土である。

この5層上位で、縄文時代晩期のもと思われる土器片が出土したが、いずれも小さすぎて図化するにはいたらなかった。なお、これらの土器片には顕著なローリングの痕跡は残っていない。また第44図51に示す磨製石斧の頭部が表土から出土した。安山岩の横長剥片を用いたもので、表裏に粗い調整剥離が入り、側面及び側縁部に斜め方向の磨きを加えられている。おそらく5層中にはまり込んだ土器と同じく縄文晩期のもではなかろうか。

第15トレンチ

今までの中で述べてきた「東側の浅い谷」、これは堆積谷であるが、これはこのトレンチを設けた

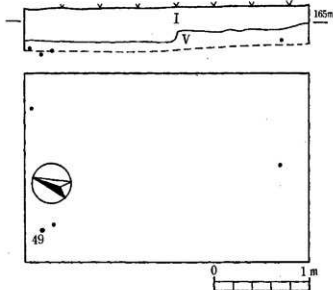
辺りで他の堆積谷と1つになり、テラス状の地形となる。

昭和60年度に調査された前谷遺跡もこの平坦状にあり、このトレンチとの距離はほぼ200 mである。この平坦面の北側は尾野見川によって解析された谷によって区切られている。

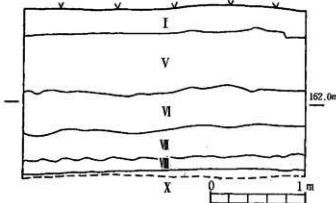
以上のような地形的要因から、前谷遺跡と前谷B遺跡とが連続するか否かを確認することを期待して発掘したのであるが、2から4層は削平されており、それはできなかった。また、前谷遺跡では縄文時代早期の土器及び先土器時代の石器も検出されていたので、これらの時期の遺跡の広がりを確認するべくシラス層まで掘り下げたが、何等の遺跡も見られなかった。

第16トレンチ

このトレンチは、第8から10トレンチのほぼ中間に設定した。前谷B遺跡の乗る尾根はこの辺りから頂部が平坦面をもつようになり、このトレンチを設けた箇所は



第38図 第14トレンチ平面図・土層図

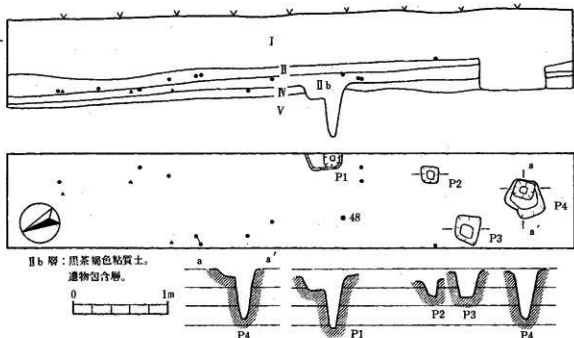


第39図 第15トレンチ上層図

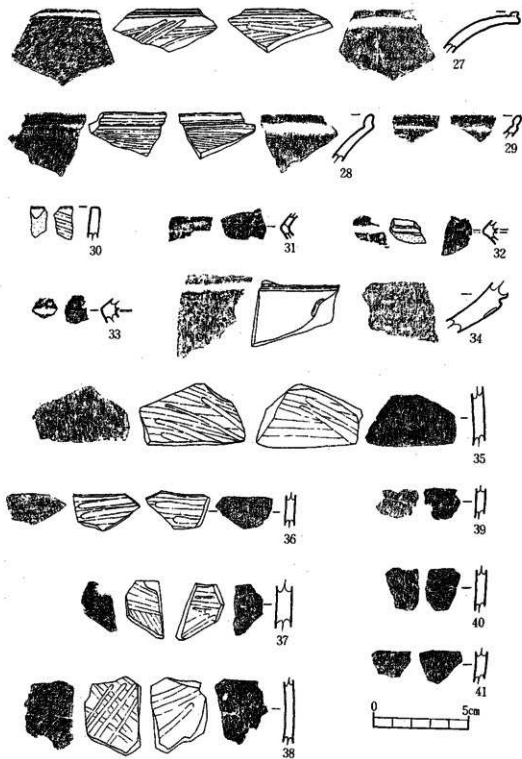
そのほぼ中央部である。また東側には別の谷の谷頭がある。

このトレンチでは平面方形の柱穴と思われるピットが4個検出された(第40図)。このうちP i t 1と同4は二段掘りされており、半截による観察で、最底面は先細りになり、中途の段は平坦面であることが確認された。Pit2・3はこの2つに比べ浅く、2段掘りでもない。Pit4とPit2・3の組合せになり、異なった建物である可能性がある。これらのPitの時期は、埋土及び掘り始めの2 b層とした2層土がやや砂質がかった層であり、この層から土師器の小片が出土していることから古代遺構であると判断した。

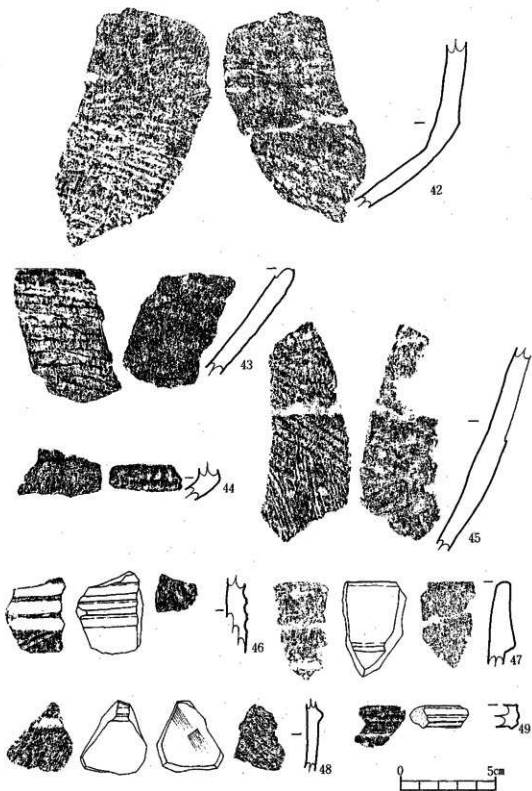
第43図48はこの2 b層から出土したものである。



第40図 第16トレンチ平面図・土層図



第41圖 前谷B遺跡出土遺物-1-



第42图 前谷B遺跡出土遺物-2-

第5章 総括

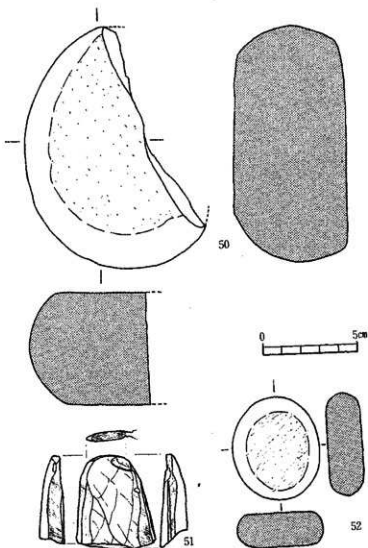
以上述べてきた確認調査の成果を踏まえた上で、それぞれの地区について、工事着工前に記録保存の措置がとられた。

稗ヶ迫B遺跡・稗ヶ迫C遺跡が存在する仮屋地区の切り土部分については、表土を取り除いた段階で精査した結果、人為的な遺構・遺物はなく、遺構らしき落ち込みは樹痕であることが判明した。その理由として①平面形・断面形が不定形であること。②埋土が一つ一つの落ち込みによって異なること。③落ち込みの配列に規則性がないこと。④遺物の出土がないこと。が掲げられる。

草之瀬地区については、確認調査において遺構・遺物ともにみられなかったので、そのまま着工した。

前谷B遺跡の存在する前谷地区については、本調査を実施した。その結果、縄文時代晩期の土坑3基、弥生時代中期の住居跡3基を含む多くの資料を得ることができた。

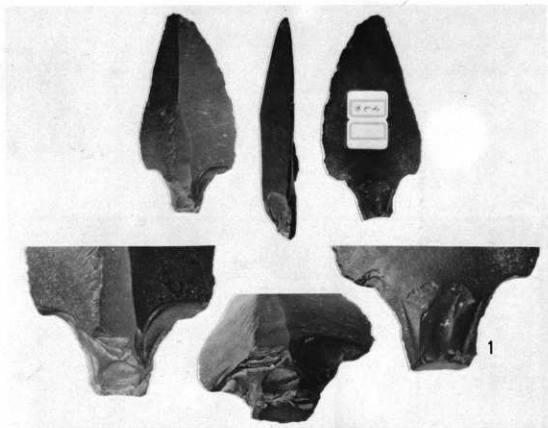
これらの成果については平成元年度に整理し、報告書を刊行する予定である。



第43図 前谷B遺跡出土遺物-3-

圖

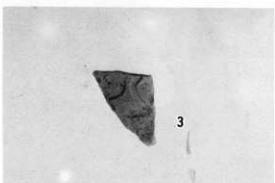
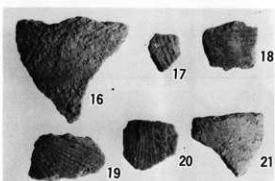
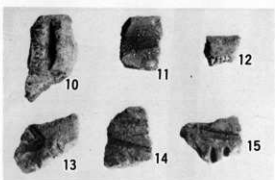
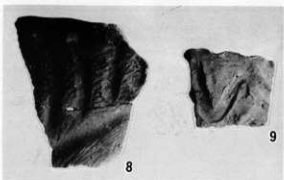
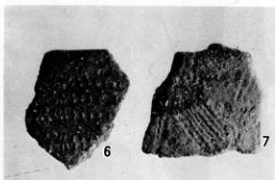
版



松山町立歴史民俗資料館所藏尖頭器



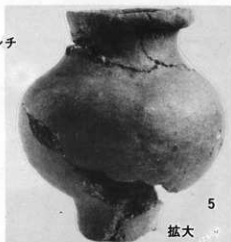
草之瀬地区採集尖頭器





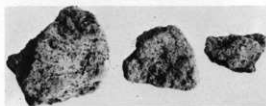
稗ヶ迫遺跡第7トレンチ

5



5

拡大



前谷B遺跡第5トレンチ



前谷B遺跡第7トレンチ



前谷B遺跡第12トレンチ



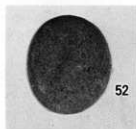
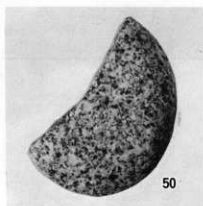
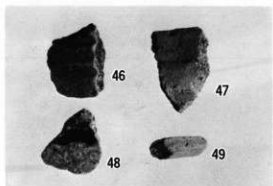
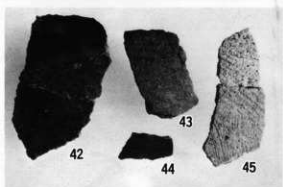
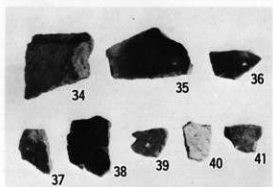
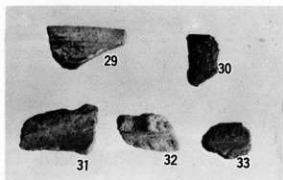
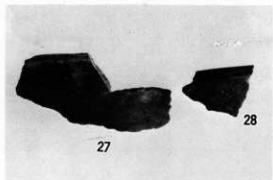
前谷B遺跡第13トレンチ



前谷B遺跡第14トレンチ



前谷B遺跡第16トレンチ





稗ヶ迫B遺跡第2トレンチ



稗ヶ迫B遺跡第5トレンチ



稗ヶ迫B遺跡第4トレンチ



稗ヶ迫B遺跡第4トレンチ



稗ヶ迫C遺跡遠景



稗ヶ迫C遺跡第8トレンチ



稗ヶ迫C遺跡第9トレンチ



稗ヶ迫C遺跡第10トレンチ



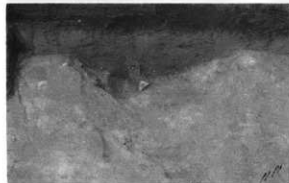
稗ヶ迫遺跡第11トレンチ古道



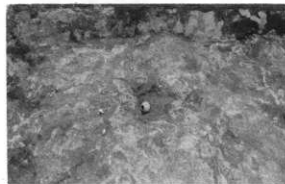
稗ヶ迫遺跡第11トレンチ



稗ヶ迫遺跡第11トレンチ土坑埋土



稗ヶ迫遺跡第11トレンチ土坑



稗ヶ迫遺跡第7トレンチ土器出土状況



稗ヶ迫遺跡第7トレンチ焼土



草之瀬地区第13トレンチ



草之瀬地区第14トレンチ



前谷B遺跡第1トレンチ



前谷B遺跡第2トレンチ



前谷B遺跡第5トレンチ



前谷B遺跡第5トレンチ



前谷B遺跡第12トレンチ



前谷B遺跡第4トレンチ



前谷B遺跡第8トレンチ



前谷B遺跡第9トレンチ



前谷B遺跡第10トレンチ



前谷B遺跡第14トレンチ



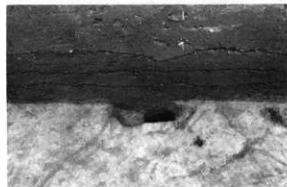
前谷B遺跡第11トレンチ土坑平面



前谷B遺跡第11トレンチ土坑断面



前谷B遺跡第16トレンチピット



前谷B遺跡第16トレンチピット

発掘作業員

上原光子・萩迫フジ・萩迫ツルエ・小名川ツギ・柿元テル子・柿元ノブ・佐々木エイ子
竹下ミキ・谷口安子・滝川エミ・永田ハツミ・永田ミツエ・永田和子・平田チヅ・福田エル
前田ミツエ・村田ユミコ・森春子・山口キミノ

整理作業員

白井綾子・有留珠美

松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

稗ヶ迫 B 遺跡

稗ヶ迫 C 遺跡

前谷 B 遺跡

発行日 1989年3月

発行者 鹿児島県曾於郡松山町教育委員会

〒899-76鹿児島県曾於郡松山町新橋268

印刷 平成印刷

宮崎県都城市神之山町2035番地

